第10回 ピースボート日韓クルーズ

PEACE & GREEN BOAT 2017
PEACE&GREEN BOATがめざすもの

市民交流が築いていく東アジア共同体

本年10月30日、江戸時代の朝鮮通信使に関する記録が歴史的に価値の高い文書を対象とした国連教育・科学・文化機構（ユネスコ）の「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録されることになりました。朝鮮通信使は、朝鮮王朝が日本に派遣した外交使節団で、1607年から1811年まで12回の外交記録や旅行記録などが含まれます。日本は朝鮮通信使を受け入れることを通じて、祭礼や書画や玩具など世界各地の生活文化に朝鮮の文化が浸透しました。豊臣秀吉による壬申倭乱（文禄・慶長の役）で朝鮮王朝と日本との関係が非常に悪化していたことも踏まえると、江戸時代に朝鮮通信使が果たした役割の大きさは想像以上のものがあります。

日韓の関係は、政治からスポーツ、文化の面においても、どちらが優れているかとか、どちらがより強いかという比較の対象として語られることが多いです。そうしたなか、ユネスコへの申請にあたり、関係自治体などで構成するNPO法人（事務局・長崎県対馬市）が韓国の団体と共同申請したことの意義は大きいのではないか。日韓両国の市民が共に誇りのる両国友好の歴史として朝鮮通信使を捉えたということを意味します。

日韓クルーズ「ピース&グリーンポート」は今年で10回目のクルーズを成功させました。これまでの参加者は総計1万人を超えています。東日本大震災、セウォル号の沈没事故など日韓双方に様々な困難を抱えながらも、私たちは共同でこのクルーズを実現させてきました。今後も続けることで、朝鮮通信使のように未来誇れるような成果を残していきたいと考えています。

また、本年10月、ピースボートが国際連合団体として参加している核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞しました。「ピース&グリーンポート」においても、在韓被爆者へと証言していただくことで、「核戦争もない持続可能な東アジア社会をめざす日韓市民宣言」等を発表してきました。核兵器禁止条約日本も韓国もまだ批准していません。米国の核の傘に依存しない平和な東アジア共同体を築いていくことは核戦争を世界を実現する道につながいます。そのためにも私たちはこのクルーズを続けていきたいと思っております。

2017年12月
野平晋作 ピースボート共同代表
ビープートの第1回ルートが出航したのは、1983年。「みんなが主役で船を出す」を合い言葉に、好奇心と行動力いっぱいの若者男女が世界各地を訪れ、様々な国や地域に暮らす人々と直接接することができるようになりました。ビープートが目指すのは、それは船で通じて、国と国との交流を活発にし、地域市民の一人として、平和の文化を築いていくことです。そんな地球市民のネットワークづくりに必要な人との「出会いの場」や、世界が抱えるグローバルな問題を現地の人たちと共有できる「学ぶ場」、そしてそれを踏まえて実際に一人一人が「行動できる場」をビープートは提供してきました。

環境財団は、2002年に設立された韓国最初の環境教育専門公益財団です。文化的なアプローチを通じて環境の大切さを知らせる教育を続けてきました。日韓市民が同じ船に乗り、アジアの環境と平和など共同課題を解決していく「PEACE&GREEN BOAT」、環境と人間の共存をめざす「ソウル環境映画祭」、「環境危機時計」など様々なキャンペーンを行い、環境に配慮した生活を広めて努力を続けています。また、アジア生命プロジェクト「生命の井戸」や「太陽光電灯支援」、アジア環境団体支援や次世代の環境リーダー育成などの事業を通じてグリーンアジアを作りのに力を入れています。さらに「子ども環境センター」を立ち上げ、子どもたちが命の大切さを学び、尊重し思いやりのある人間として成長できるよう努力してきました。

2017 PEACE&GREEN BOAT

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>火</th>
<th>水</th>
<th>木</th>
<th>金</th>
<th>土</th>
<th>日</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>7/27(木)</td>
<td>夜</td>
<td>神戸出航</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7/28(金)</td>
<td>朝</td>
<td>琵琶湖ルーディング</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7/29(土)</td>
<td>午後</td>
<td>青木(金岡)入港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7/30(日)</td>
<td>午後</td>
<td>青木(金岡)出港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7/31(月)</td>
<td>水</td>
<td>琵琶湖ルーディング</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/1(火)</td>
<td>夜</td>
<td>関西ルーディング</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/2(水)</td>
<td>朝</td>
<td>関東入港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/3(木)</td>
<td>夜</td>
<td>関東出港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/4(金)</td>
<td>午前</td>
<td>堺出港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/5(土)</td>
<td>午後</td>
<td>神戸入港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8/6(日)</td>
<td>午前</td>
<td>神戸出港</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
吉岡達也（PEACE&GREEN BOAT 共同代表、ピースポート共同代表）

ついに「PEACE&GREENBOAT」は第10回という歴史的なクルーズを終えました。12年間、日韓合わせ1万人以上の方々がこのユニークなクルーズに参加されました。「10回」という数字はまさに、その方々おひとりひとりの存在によって達成されたものに他なりません。しかし、「それで2005年の初航海の時よりも世界が平和になったのか？」と問われると残念ながら首をかたどり振ることはできません。際限ない核兵器開発、汚染の泥沼化、大量の難民発生、拡大する歴史認識の相克、頻発するテロとヘイトスピーチ、そして気候変動の激化21世紀は、夢の世界ではなく、悪夢の世紀になろうとしているように思えます。しかし、私たちは、この10回の平和と環境のための日韓市民のクルーズを通じ、未来への力強い「希望」を発見しました。その発見は、そんなに難しいことではありません。手たずや言葉や文化や習慣が違っても相手の考えを理解し、相手の気持ちを想像し、共感することができるということです。

たとえば、東日本大震災直後のクルーズでは多くの韓国からの皆さんが被災者支援の声をあげて下さいました。また、日本からの多くの皆さんセウォル号の悲劇に心から涙されました。

私たちは国境を越えてつながる力があります。私たちはこの不思議な力によって得た世界中の友人たちとピースポートを35年間出し続けて、韓国の友人たちと「PEACE&GREEN BOAT」を10回にわたり出し続けてきました。

私たちは、その友人たちとともに、東アジアに、そして世界に平和で持続可能な社会を実現すべく、これからも船を出し続けます。とりあえず、第20回「PEACE & GREENBOAT」が船出するその日まで、ご参加ご支援よろしくお願いいたします。

チェ・ヨル（PEACE&GREEN BOAT 共同代表、環境財団・理事長）

PEACE&GREENBOATが10回目のクルーズを終えました。韓国と日本、各地域から海の上の特別な村へ駆けつけていらっしゃったみなさんが、ようこそ、ピースポートへ。

国際と世代や性別も違う私たちが、一丸となって、東アジアの平和と環境を守ろうという気持ちは同じです。そのため、私たちは「同じ船に乗り」それで自然に運動共同体となっています。私たちが7泊8日間一緒に寝て、一緒にのご飯を食べながら自然と生態、歴史、文化があふれる寄港地を旅します。ふたたび、船に戻ったら環境と平和を語り合い、踊り、一緒に歌うでしょう。単純に見えるその過程の中で、私たちはお互いに対して学び、共感しながら相手のことを理解できるようになります。

PEACE&GREEN BOATの過去10回をふりかえってみます。初めて船を出した2005年の日韓関係は激しく対立がありました。毎年様々な困難に直面しました。しかし、私たちが続いて船を出し、対立を乗り越えるため数多くの努力をしてきました。それは、問題解決の種は人と人の間にあると信じていたからです。やっと私たちの対話の成果が水面の上に現れたように感じます。

こんな時だからこそ、私たちは東アジアの平和と環境の木を大きく成長させるようより多くの交流を必要とします。私たち一人ひとりが東アジアの平和と環境問題解決にあたって非常に重要な役割を担っていることを心に刻みたいと思います。
日韓共同クルーズ「PEACE&GREEN BOAT」第10回記念共同声明
〜真に平和で持続可能な東アジア共同体をめざして〜

第1回日韓クルーズ「PEACE&GREEN BOAT」は2005年に船出しました。

それは、戦後60年、すなわち韓国の日本植民地支配解放60年の年であり、かつまた日韓国交正常化40周年を記念した「日韓友情年」でもありました。そして、また気候変動枠組条約、いわゆる「京都議定書」の発効の年でもあったのです。

時まさに、世界では地球温暖化による気候変動の危機が叫ばれ、日韓では第一次韓流ブームが盛り上がると一方、靖国参拝問題、竹島／独島問題、「慰安婦」問題など厳しい政治状況の荒波が私たちを待ち構えていた時期でもありました。

しかし、私たちは、「今こそ、環境と平和を掲げる日韓のNGOが力を合わせ、市民の命を守る平和環境共同体の礎を東アジアに築かねばならない」という強い思いを共有し、東アジアの大海原へと航海を始めたのです。

その後、12年間に渡り、私たちは対話と相互理解と信頼によって数々の困難を乗り越え、ついに10回目の日韓共同クルーズを実現するに至りました。両国からの参加者は実にのべ1万人を超え、大型客船を使ったユニークな直接交流により、かつてない規模での日韓市民間の友情を築いてきたと自負しています。

その歴史の中で、東日本大震災と原発事故、そしてセウォル号沈没事故は日韓ともにあらためて市民の命と安全をえないがしろにする政治と社会のあり方に向き合う悲劇的なきっかけとなりました。先ごろ、韓国では100万人キャンデルデモによって誕生した新政党が、原発の危険性を認め脱原発政策を宣言したことに対して、私たちは賛同と敬意を表します。同時に、未だ福島第一原発事故の教訓を無視し、原発推進政策を進める日本政府に対し脱原発、自然エネルギー推進への政策転換を強く求めます。

一方で、「PEACE&GREEN BOAT」は初航海以来、4回にわたり被爆地・長崎を訪れ、日韓市民とともに直接、被爆者の方々の証言をお聞きしてきました。それゆえ本年7月7日の国連における核兵器禁止条約採択は、まさに私たちの長年の願いの実現でもありました。しかし、残念ながら日韓両国政府は「核兵器による抑止力は必要」という理由で、この条約に加盟していません。私たちは両政府に、人類への破滅的被害を回避することを目的とした、この条約への参加を強く求めます。

そして、もう一つの人類に破滅的被害をもたらす存在、地球温暖化による気候変動に対しても、私たちは全てを挙げて引き続き行動していくとともに、自然エネルギー推進、平和、気候変動対策を含む国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けて包括的かつ創造的に取り組んでいきます。

最後に、私たちは、来年の平昌オリンピック、そして2020年の東京オリンピックが真の平和の祭典として、環境を最大限考慮した持続可能なオリンピックとなるよう「PEACE&GREEN BOAT」の活動を通じて協力し合い、その過程が来たる「東アジア平和環境共同体」建設への礎となるよう努力することをここに表明します。
このコースでは、水先案内人の李泳采（イ・ヨンチェ）さんの案内とともに、日本ではあまり知られてこなかった麗水（ヨス）の歴史を学びました。

今回訪問した麗水市は、韓国南部に位置する人口約30万人の都市です。ここは豊臣秀吉による朝鮮出兵を撃退した韓国の英雄李舜臣（イ・スンシン）将軍が活躍した場所です。また、1948年に朝鮮半島の統一、独立を巡る論争が起こるなか、軍の一部が政府の方針に逆らって、麗水事件という反乱を起こした地域でもあります。

まず、李舜臣将軍が戦死した後に部下たちが建てた偽落碑（だるいひ）を訪れました。1592年の壬辰倭乱（文禄の役）において、李舜臣将軍は全羅（チョル）佐水使として秀吉の軍を撃退するという大きな戦果を上げましたが、その後、朝鮮王朝の皇帝の命に逆らうこととなり、一兵卒に落とされます。そして、1597年の丁酉倭乱（慶長の役）で朝鮮水軍がほとんど壊滅する中、再び水軍を任され戦っている最中に戦死しました。その後の国王である光海君は将軍の名誉を回復するため、1615年にこの偽落碑の横に統制李公水軍大捷碑を建てたそうです。

次に訪問したのは、麗水・順天（スンジョン）事件についての調査・研究を行っている麗水地域社会研究所で、李英一所長に話をうかがいました。

日本の敗戦後、朝鮮半島では人々が自由に独立を訴え始めました。しかし、米ソによる影響を受け、朝鮮半島を二分した形で独立するのかという激しい論争が広まります。これにより、1946年10月には「大邱（テク）民衆抗争」、1948年には濟州島で民衆蜂起が生まります。そして、この濟州島での蜂起に対して麗水の14連隊が派遣されることとなりましたが、同連隊の2/3が同じ同胞を殺害することはできないとし、反対の意見を表明し、反乱を起こしました。この動きに対して、李承晩大統領は軍を派遣し、鎮圧しました。このとき派遣された政府軍は日本軍として満州の三光作戦に従事していた親日派の軍人が使われていました。

そして、その後の1980年に起きた光州（クァンジュ）事件、1987年に起きた大統領の直接選挙制改革を中心にした民主化を要求した6月民主抗争、近年の朴槿恵大統領へのキャンドルデモなど、この麗水・順天事件などは市民の反対運動の始まりでもあったと言えます。それとともに、市民を守るための政府が、市民を虐殺したことから、どの国でも民度が低下する国が暴力で支配し、市民を虐殺するようになると指摘しました。
ウラジオストック

今回寄港したウラジオストックは、ソ連崩壊する1991年までごく一部を除いてソ連国民である市外居住者や外国人の立ち入りが禁止された閉鎖都市でしたが、その後解放されるようになり、多くの人が訪れるようになりました。

このツアーでは、船舶の勉強をしているロシア国立海洋大学の学生と交流を行いました。この大学は2隻の船を持ち、北極の探査に必要な技術の研究や民間企業との技術開発などを行っており、2014年に行った洋上訓練では福島近海まで行き調査の手伝いを行ったというです。

まず、最初にロシア・韓国、日本からそれぞれの国の文化紹介などが行われました。韓国の参加者からは、済州島にあるゴッチャワリ学校から16歳の学生が韓国の社会や文化などについて紹介しました。この中では宮廷料理、ビビンバやキムチ、スープにご飯を入れて食べると食文化や扇踊り、伽倻琴、K-POPsなどの音楽が紹介されました。また、社会に参加する動きとして10代、20代はセウォル号、「慰安婦」問題などに関心を持っており、キャンプでの発表を行っているということが紹介されました。そして日本からは、浴衣や和服などの衣服、祭りや寿司、天ぷらなどの和食文化、日本家屋や東京タワーなどが紹介されました。

ロシアからは、日本とは300年前から交流してきており、ロシア人の画家で日本の絵画を集めるコレクターもおり、1920年代には日本の歌舞伎などに関心が集まったということが紹介されました。また、ロシアと韓国間では海洋水族館や学術交流が行われており、今後のロシアと韓国間の定期フェリーも増便するということも話し合われているそうです。

ゴッチャワリ学校の学生によるオカリナの演奏や折り紙、日本の着物を着る体験、あるいはロシア側の学生がギターを演奏するなど、活発に交流が行われました。特に、ロシアの学生は日本の着物を着て、満面の笑みが広がっていました。

この交流会の後、小グループに分かれて、町を散策しました。グループによっては、小さなお店でロシアといえば有名なアイスクリームを買い、学生たちとウラジオストックの夏を満喫していました。また、学生たちをビースポルト船内で案内し、参加者による船内の案内が行われました。ロシア人学生の一人は、以前研究で大型のコンテナ船に乗船したことがあるが、やはりこのような多くの人々を乗せた客船で仕事をしたと、将来の夢を語ってくれました。
函館 Hakodate

中華会館にて
遠くに青森県の大間町も見えます
和洋折衷の建物

カトリック元町教会
ブルーベリー摘み

境港 Sakaiminato

古代出雲歴史博物館にて
出雲大社にて
釜山

Busan

「民族と女性歴史館」を訪れて

水先案内人の鎌田慧さんとともに、釜山にある「民族と女性歴史館」を訪問しました。この歴史館は旅行会社を経営されていた金文淑さんが私財を投じて2004年に設立したもので、「慰安婦」問題に関する資料が展示されています。金館長から、館内の資料について話を聞きました。

歴史館に入るとすぐ左側に数名の女性の顔写真が飾られています。金学順（キム・ハクスン）さんが始め「慰安婦」被害者として名乗り出た女性たちです。

日本軍の兵士の体験談や手記などから「慰安婦」の存在は見え離れてしまいました。そんな中、「慰安婦」とさせられた女性がいるのではないかと考えた市民が集まり、「慰安婦」とされた女性が名乗り出るための電話を設置しました。その後、1991年に金学順（キム・ハクスン）さんが最初に名乗り出たことにより社会的に大きな衝撃が生まれ、「慰安婦」とされていたと語る女性たちが次々と名乗り始め、北朝鮮、中国、台湾、フィリピン、オランダ、インドネシア、東ティモールなどにも広がっていきました。

1992年、元「慰安婦」、元女性労働者同士が日本政府に対する公式謝罪と賠償を求める山口地方裁判所下関支部に提訴を行います（いわゆる関金裁判）。1998年に同地区は立法不作為による国家賠償責任についての原告の訴えを一部認め、日本政府に計90万円の支払いを命じる判決を出しました。この裁判に関連して、日本政府に謝罪と賠償を求めるデモの写真も飾られています。

いくつかの写真について説明してくださった金館長は、近年では朴槿恵大統領が国定歴史教科書を使用するよう通達を出していたことを紹介するとともに、今の若い人は日本の植民地政策を知らずに育てていると言われ、（文在寅政権発足後、国定教科書は廃止されることになりました）。

今回の訪問では、このような慰安婦とされた女性たちが聞ってきた歴史を改めて見つめ、今後の日韓関係においても日本がきちんとした責任を認めていく必要性があることを実感しました。
船内企画紹介

ピース＆グリーンボートでは、日韓からの多数のゲストをお招きし数多くの企画を行いました。その一部を紹介します。

Peace & Green Boat 第10回記念合同企画 ～初航海から第10回、そして未来へ～

チェ・ヨル、吉岡達也、ジョン・テヨン、田村美和子、鎌田憲、チョウ・ミス

今回で第10回目の日韓クリーズを迎え、初航海からの歩みを多彩なゲストとともに振り返りました。まず、チェ・ヨルさん、これまで福島原発事故やセウォル号沈没事故などが起こったけれども政府間の関係がよくないときでも市民同士仲良くなることができたと語りました。吉岡達也さんは「パワフルなテ・ヨルさんとの出会いにより、我々の夢への扉は開かれた。今ではピースポートに乗るアジアからの参加者が増えています」と語りました。

ジョン・テヨンさんは、スタッフ同士、言葉が通じなくても見て理解し、感じ、実行できるものを学ぶことができたと語りました。また田村美和子さん、一緒に生活していると自分が何人だというアイデンティティもなくなりP&G（Peace & Green Boat）人なんだと思うようになったと語りました。

鎌田憲さんは、ピースポートがアジアに向けた視線を確立し、日本、韓国、朝鮮民主主義人民共和国を船がちょうどバランスをとったように乗りっぱなし Lamarが将来の姿だと語りました。またチョウ・ミスさんは、「在日コリアンの乗船者が、日韓で分けられると我々はどちらにいければいいんだかという憤慨をしています。私の目標は、このクリーズで日韓と言われない新しい東アジアの人々を作り出したいと思っていた。そして、私とあなたが出会える空間がこの船の魅力だと思います」と語りました。

ヘイトスピーチ「愛国者」たちの憎悪と暴力

安田浩一、金朋央

安田浩一さんは、ヘイトスピーチは一部の新聞などのいう憎悪表現、単なる下劣な言葉や罵倒などではなく、どんなに努力しても乗り越えることができない属性を攻撃し、差別を扇動し、人間の尊厳を奪う暴力であると語りました。またそれと同時に、それらを行っている人は世間で思われているような一部の人、何か特別な背景を持つ人たちではなく、むしろ私たちの身近にあるような人たちであり、誰にもその落とし穴は用意されている、その危険性を指摘しました。そして、その危険性について金朋央さんは「ヘイトスピーチは風邪と同じだ。自分は風邪をひきたくないけれど、ひいてしまう。それなので普段からの予防が必要であり、もしあいでもしまったら治療する必要がある」と語りました。

最後に、安田さんは「沈黙を強いられ、表現の自由を奪われているのがマニフェスト、マショウティの側にいる間がまず表現の自由を守るために差別の自由を許さない社会を作るため声をあげましょう」と呼びかけました。

ポルノ被害は自己責任？～社会の偏見と守られない被害者～

宮本節子

これまでほとんど表に出たことのなかったポルノ被害の背景について、宮本節子さんから話をうかがいました。

これまで宮本節子さんなどのソーシャルワークは、アダルトビデオに出演し、身体と精神がポロポロになり施設に入ったり女性たちの存在を調べていました。宮本さんは関係者とともに「ポルノ被害と性暴力を考える会」を立ち上げ、被害者の相談を受け始めました。そして、被害者自身が被害者だと思ってないこと

に気づくとともに、この性暴力被害を表す概念や言葉がないことを知ります。ある19歳の女性は、最初タレントにならないかと声をかけられ、20年、数か月間ジムやレッスンに通わされました。そして、民法で契約できる20歳となり、ビデオ撮影を行うというときにアダルトビデオだと気づき、相談に来ました。また、ある女性は撮影をやめることになった途端に、プロダクションから損害賠償を支払うよう迫られました。賠償金額

分、無理やり出演させられた女性もいました。最後に宮本さんは、被害者が訴えられなかったのは社会の偏見に沈黙させられているからであり、それは「慰安婦」問題と真摯に向き合う社会の体質を通じていけるものと問題の背景を説明しました。
絶滅危惧の教師たち〜日韓の「環境」「平和」教育事情
シン・キョンジュン、李泳采

韓国では環境が教育課程の科目から外され、日本では平和教育の機会の減少が指摘されています。この問題についてそれぞれの教師が意見を交わしました。

まず、ソウルの中学校で環境教師をしているシン・キョンジュンさんから、韓国の状況が紹介されました。2000年から環境問題を専門的に教える環境教師が生まれましたが、2009年から科目の名前が変わり、全国で環境教師は採用されなくなった。川が埋め立てられ、食卓の食べ物は遺伝子組み換え食品が増えている今、きちんと環境教育を学校で行う必要があると語りました。

次に李泳采（イ・ヨンチェ）さんから慶泉女子大学で行っている平和教育が紹介されました。同大学では生活文化を行い、その中で食糧問題と戦争の関係や生命に対する気づきが生まれてくると話されました。そして、学生はアジア太平洋戦争について年配者にインタビューを行ったり、沖縄、済州島、台湾などへスタディツアーを行ったり、東アジアの歴史を考える学習も行っているという報告が行われました。

挑戦者〜私がパフォーマーになったわけ〜
ちゃんヘン

在日コリアンとして生まれ、そのルーツに対する偏見や困難に遭う中、どのように生きてきたのかちゃんヘン、さんが語りました。

日本に於ける植民地支配の下、多くの人が朝鮮半岛から日本に渡りました。そして、日本の戦後に起きた朝鮮戦争により、多くの人は母国に帰れなくなったり、ちゃんヘン、さんは京都生まれの在日3世で、両親は朝鮮学校出身だったのですが普通の日本の学校に通うことになります。しかし、そこで仕組みない生活を食べました。そのような中、中学の時にジャーナルクラブに出会い、米国に行き、実力を試したいと思うようになりました。家族に相談します。親族は南北バラバラに住んでいます。米国に渡るのならば韓国籍といえる時代になった時に、祖母は「南北分断、民主分断、朝鮮戦争を認めのか」とちゃんヘン、さんに強く問いかけました。

在日6世が生まれたということです。ちゃんヘン、さんは、祖国が断絶され、日本で生きる中、夢を持ってその道を歩み続ける、その姿勢を自作のラップ「根無し草」で訴えました。

この船に集まった人々〜私のルーツ〜
金朋央、李正久、イ・ヨンホ、岡田環子、樫木典子

この船には多種多様なルーツを持つ方々が乗船しています。今回、金朋央さんが参加者の方々のルーツとその生きてきた歴史を聞いたのです。

在日朝鮮人2世の李正久さんは、日本から米国に行く際、日本政府が発行した渡航証明書を持っていたのです。米国の入国管理局で「このパスポートは何だ、難民か」といわれ、足止め食らったときのことを語りました。また、ソウル生まれのイ・ヨンホさんは、高校の時に来日し、その後韓国の大学へ進学し、再び日本に戻りました。日本に帰ってきてもアルバイトをしていた同僚の人たちがとても温かい人たちであったと話しました。

樫木典子さんはソウルで生まれ、祖父の時代に満州に渡り、日本の戦闘時には中国の丹東にいました。そして、ソ連軍が丹東へ入ってきた後、中国共産党軍が来て1年足止めを受けた後、米軍支配下の仁川へ行き、貨車で釜山まで横断、正規の引き上げ船で博多へ行き、国鉄で名古屋にたどり着いたと、その困難な帰国の道のりを語りました。また岡田さんは、父親は台湾人で、母親は日本人で、アイデンティティに関して精神的に浮遊感があったと語り、思春期の揺れ動きはこの船の揺れがぴったりだったと、その複雑なルーツを背負う人生について語りました。
韓国の民主化は日本に何を突きつけているのか

野平晋文

韓国では100万人を超えるデモが連日行われ、文在寅政権が誕生しました。しかし、支持率が8割を超える文在寅政権のことを日本では反日、親中の国だった政権だと報道しています。

この日韓の認識のギャップには歴史認識の違いにあると野平さんは語りました。韓国では、日本による植民地支配から解放された後も、親日派と呼ばれるかつて日本による統治に協力した人々が権力を握りました。韓国の民主化は「親日派」の政権を打倒すること、日本による植民地支配の負の遺産を清算することであったと言えます。したがって、韓国の民主化は「反日」政権の誕生となります。しかし、「反日」とは「反日本帝国主義」のことで、日本が嫌いということではありません。ドイツの反ナチスに近い概念です。日本はドイツと違って過去を清算できていないため、日本が過去に行った植民地支配や侵略戦争を批判されると、それを現在の日本を批判するものとして受け止めます。変わるべきは、「反日」の韓国ではなく、過去を清算できない日本の方ではないでしょうか。韓国で、解放後に自国の政権が行った人権弾圧の真相究明が行われているにもっと注目すべきです。韓国の民主化は日本だけでなく、自国過去清算を求めていると訴えました。

日韓合同企画トークセッション「共存」

キム・ヨンジン、ソ・ジョンソク、キム・ウンギョン、安富歩、林篤志

宗教、人種、性、環境などの違いがある中、私たちが共存していたために必要なことを多様なゲストを迎え、意見を交わしました。

まずソ・ジョンソクさんは、韓国では子育ての環境が変化したため、子育てをすることで幸せというよりも負担に感じる人が多くなっていると言います。その理由として、産後の肥満や子育て経験が不足するという形ではなく、婚活など再利用し、居住地をどこに住みつけるような流動的な社会であると語りました。

次にキム・ウンギョンさんは、環境を保護しなければというときに自分と関係ないと思う人が多いので、視覚的に問題が見えるよう、手作りの花や紙を作り、環境活動を芸術とし利用していますと語りました。また安富歩さんは、これまでの資本主義経済のルールが崩れてきており、これは日本人だけが共有する社会を作るべきだと訴えました。

不確実性時代の日韓若者の失望と夢

カン・ミョング、今井紀明、宮本敬子、キム・ヨンギュ、田中希望

日韓ともに不景気になり、将来を見通せず、生き辛さを抱える若者が増えています。今回その背景にある社会的問題を探りました。

日韓及び欧米の若者の結婚観について研究をしているカン・ミョングさんは、日本ではお金もあり能力もあるが男女が女性には興味がないという「草食男子」が生まれ、韓国では貧困のため恋愛、結婚、出産を放棄した「3放世代」が現れていると、両国の若者の現状を紹介しました。また宮本節子さんは、1970年代から貧困の再生産が見えてきたと言い、日本は現在貧困連鎖の3世代目であり、経済的な貧困をベースにして労働関係の排除、教育の排除、社会関係の排除が現状を作っていると指摘しました。今井紀明さんは、若者の結婚について、経済的に厳しいということもあると思うが、コミュニティに所属していないことにより人間関係が薄いこともあるのではないかと疑問を呈しました。また、韓国の女子学校で教えている参加者からは、女子学生はお母さんや周りのおばさん見ているとおり、結婚したいと思わないようになっており、韓国社会では結婚のメリットがなくなっているのではないかという意見が出されました。
今も原発災害の影響によりさまざまな困難を強いられている福島から、NPO「南相馬こどものつばさ」を通じて南相馬市の中高生11名が乗船しました。また、ブラジル領事館との共同プロジェクトで日本に住む日系ブラジル人の2名の子どもたち、副領事を含め6名が乗船しました。その他、一般の参加者として日韓から多くの中学生以下の子どもたちが乗船しました。

船内では、韓国の子どもたちと環境問題について一緒に考えたり、お互いの言語を学んだりしました。そして、訪れた寄港地でも、文化、食事、歴史、環境、戦争など様々なテーマについて学ぶ旅となりました。

福島子どもプロジェクト

ビースポートでは、保養と国際交流の体験を通して、子どもたちに健康と夢を届けたいとの思いから、2011年の震災直後に「福島子どもプロジェクト」を立ち上げ、一般社団法人ビースポート災害ボランティアセンターとともに実施しています。

在日ブラジルユースプロジェクト

このプロジェクトは、2014年からビースポートと在日ブラジル総領事館が協力して行っているもので、日本に住む日系ブラジル人の高校生を対象にエッセイコンテストを実施し、その優秀者を船旅に招待するという取り組みです。
GF子ども 洋上学校

これからの未来を担う子どもたちが「一つの船」に乗り、東北アジアの環境、歴史、文化に触れ合い、船内でも様々な分野の専門家から話を聞いながら、将来の夢膨らむ船旅を毎年行っています。

PB子ども アクティビティ

未就学児、小学生の参加者も洋上生活を楽しめる企画したのが「子どもアクティビティ」です。このアクティビティは子どもの好奇心、学ぶ力と表現力を育む多彩な船内プログラムです。
今回のビジネスツアーでは、講演者との相違的対応の結末でコミュニケーションできるのが魅力的でした。船内では、船員たちの話やビジネスの話、コンビの物語なども聞きました。特に、コンビが住んでいる「他人を通じて自分を知る」というフレーズが印象に残りました。香港ででは、講座には、多様な宗教の教えが地域に集まっていて、それは意外で、日本は宗教が多く、神社が多いと感じました。また、香港の旅行において、視野が広がると言われますが、この回の旅を通して、その視野を広げるということは自分を広げることだと考えることができました。

2006年にPeace Green Boatに参加したことができました。その時、独身だったのですが、家族ができた גילにまた乗れないと思い、今から11年ぶりに妻と子どもとともにに乗船しました。子どもの連れだったので、お年寄りがよく声をかけてくれ、赤ちゃんのおかげだと思います。

また、香港に住むロシアのウォランスキーのツアーで、海洋大学の学生たちと交流することができました。地域の人たちと交流することでバリアレス旅行では難しいですが、私自身海洋関係の仕事をしているのでとてもよかったです。

Peace Green Boatは今年も参加していますが、これからの参加者が増えています。これからは海洋の価値も集めるためにももっとよいと思います。そして、その時にはまた乗ってみたいと思っています。

2012年に脱原発クルーズを遂げたPeace Green Boatに乗船して以来、毎回Peace Green Boatに乗っています。これまでこのクルーズでは、日韓の参加者とイムジン川や朝鮮などで歌を歌っていました。日本の参加者とイムジン川で歌を歌うことが多かったです。今でも参加者数が増えており、カルチャー交流に参加することが大切ですね。

このクルーズで知り合った韓国の方とは、国を超えて、互いの家へ行きをお互いに発展しています。

2005年のPeace Green Boatから、このクルーズに乗船することが楽しみであります。今年のクルーズでは、音楽やビールを一緒に楽しみながら、自然に触れながら、互いの言語を学びながら、楽しい旅をしています。
INDEX

水先案内人一覧

今井紀明／認定NPO法人D×P代表
李泳采／東京大学大学院准教授
片岡英夫／NPO法人 世界遺産アカデミー認定講師
鎌田慧／ルボライター
金剛央／Coria NGOセンター東京事務局長
ちゃんヘン／世界的パフォーマー
林篤志／Next Commons Lab代表
宮本節子／フリーソーシャルワーカー
安田浩一／ジャーナリスト
安富歩／東京大学東洋文化研究所教授

環境財団ゲスト一覧

イ・ハンチョル／歌手
イ・ヒョジェ／株ヒョジェ代表、韓服デザイナー
ウン・ヒギョン／作家
キム・ウンギョン／ワイヤーアーティスト
キム・ハンジョン／日本共産党・国会議員
キム・ヒョンジュ／CBSプロデューサー
キム・ブギョン／ブズ代表
キム・ヨニ／大邱大学校社会福祉学科教授
キム・ヨンジ／CBSアナウンサー
グァ・ドンホ／マジシャン
コ・ヨンハ／韓国エンジェル投資共創協会会長
シン・キョンジュ／韓国環境保護会スポーツマン
ソ・チョンソク／幸せな子研究所所長
ソン・キリョン／株式会社DAMM SOFT社長
チェ・ガンウ／法務法人チョムク弁護士
チェ・ヨル／環境財団代表
チョ・ジマン／チョ・ジマンアーキテクツ代表
チョ・ジヨン／フォトグラファー
チョ・ユミ／パブリシスワンコリア（Publicis One Korea）代表
チョ・ジェスン／韓国科学技術院(KAIST)バイオ・農工学科教授
パブリック・ラジオ／パブリックアーティスト
ハン・ヒア／世界市民学校校長
ノ・ソン／アートセンター・アート館長
ハドンヨン／ソウル大学病院ヘルスケアシステム・カンナムセンター院長